

自然の中で生きる人々を劇場型で展示

山梨県立博物館 かいじあむ

昨秋開館一周年を迎えた山梨県立博物館は博物館の常識を覆したと評価が高い。時代ごとの資料の陳列、郷土が輩出した人材の業績紹介といった博物館の定石を破り、日本の歴史に新しい光をあてた山梨出身の歴史学者、同博物館構想検討委員会の網野善彦委員長の主唱のもと、地域の庶民の暮らしに視座を置き、ジオラマや映像、音響を駆使したダイナミックな劇場型展示が目ざされている。

基本テーマは「山梨の自然と人」

遠く1200年の昔、天平13(西暦741)年聖武天皇によって発布された「国分寺建立の詔」によって、甲斐の国分寺および国分尼寺は、いまの笛吹市一宮町国分に建てられた。山梨県立博物館のすぐ近くである。「それ造塔の寺兼ねて国華たり」といわれ、その荘厳な寺の裏は、甲斐の国に燦然と輝いていたに相違ない。構想策定時から課題とされているこの博物館の交通アクセスだが、歴史的に見るとまさに適地といえるのではなからうか。

近年「石和温泉」と改称されたJR中央本線の駅から約2km、国道20号勝沼ハイパスに沿うように山梨県立博物館はその瀟洒な姿を見せる。近辺には桃やぶどう畑がどこかにひろがり、まさに果樹王国山梨の中心ゾーンである。透明なガラスの箱のような建物は、全館ワンフロアで構成されていて、パリアフリーに配慮した設計となっている。

甲斐の語源はこれまで山と山との間を示

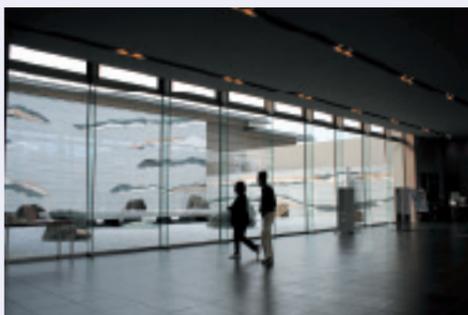
す「かい(峡)」といわれてきたが、最近では古代の東海道と東山道をつなぐ結節点としての「交い」と考えられるようになった。これをもとに「人と地域との交流」が博物館のコンセプトとして導きだされ、様々な展開されている。

まずアプローチ空間では「地域インデックス」と「テオライブラリー」が県下一円の市町村とネットワークし、さらに子どもたちにはアピールするよう設けられた「キッズライブラリー」が来館者の目を引いている。常設展示の導入部には、盆地部から南アルプスの高峰まで、3000mの標高差を持つ風土の特性を象徴的に見せる高精度の衛星写真が立体的に構成され、子どもたちは争ってわが家のありかを探している。

陽光のもと軽やかなたたずまい シャープなデザインの山梨県立博物館 かいじあむ



メインエントランスに面した水辺に設けられた州浜



山々に囲まれた山梨の地形を表現した中庭「余白の台座」 関根伸夫 作



ロビーから眺める四季折々に美しい庭園



博物館での楽しみのひとつ 明るいレストラン

メイン展示のハイライト ジオラマ

期間限定で山梨の国宝や重要文化財が展示されるシンボル展示に続くのがメイン展示の大空間である。テーマとして平安期に都に献上された良馬甲斐黒駒、信玄堤に代表される水との取り組み、鎌倉新仏教と祖師たち、甲斐源氏から武田信玄など時代を切り開いた武士たちが紹介される。なかでも圧巻は「里にくらす」「城下町の賑わい」「山に生きる」など、12分の1のスケールの人形400体が活躍するジオラマで、この博物館のハイライトであろう。ここでは知恵と技をつくす農民や、江戸文化を享受する町民のくらしが、田や畑、城下町を背景にリアルにユーモラスに表現され、見てたきれいな女性に仕上がっている。猫が出没していたり、地面の下に当時最先端の上水道がのぞいていたり、様々な話題とストーリーが組み込まれていて、子どもたちや来場者の心を捉えている。

江戸から明治へ 先進的な産業と文化

また甲斐の繁栄を支えた高瀬舟による富士川水運、東西南北を結ぶ諸街道や巡礼の道などが紹介され、その結果もたらされた最新の江戸文化の結晶として芝居小屋、座と市川十郎、道祖神祭りや歌川広重の幕絵など、豊潤な当時の甲府の都市文化がしのばれる展示となっている。また、かつての養蚕王国から果樹王国への転換など、時代とともに変遷する産業の様子も興味深い。とりわけ、かつて甲州財閥を形成し、「乗り物と灯りに将来性あり」と説いた若尾逸平をはじめ、甲武鉄道などの根津嘉一郎、東武鉄道、秩父鉄道などの根津嘉一郎、そして阪急電車の小林一三など、テーマ交流の象徴のような交通を手がけた人物像は、近代日本を切り開いた甲斐の人々の開明性と進取性を端的に示している。またこのように歴史の光の部分だけでなく、影の部分でも第二次世界大戦の惨禍、度重なる大水害など、負の部分の紹介もされていることに

歴史の体験工房と屋外エリア

特徴的なのは単に観る学だけでなく、様々な体験の機能がある。昔の子どもの遊び、農作業や両替商の仕事、駕籠での旅などで、特に人気の高いのが「十二単」「水干」「上袴」「大鎧」など歴史的な衣装で、実際に身につけて体験する子どもに、親たちが懸命にカメラを向けている光景が微笑ましい。広大な芝生がひろがる屋外エリアには四万本の草木が植えられ、「甲斐八珍果」「古代の畠とぶどう畑」など、郷土の食文化を学ぶとともに、種まきから収穫、調理までもが実際に体験できるゾーンとなっている。



山梨の地名の起源ともなったシンボルツリー「ヤマナシ」の木



甲州八珍果など4万本が植えられ 学習もできるドングリの森



自分の家も探せる 高精細衛星写真による山梨県の立体パネル



400体のミニチュア人形が活躍するジオラマ 城下町甲府の賑わい



来場者の人気を集めている体験型展示 歴史の体験工房



「かいじあむ」の水先案内人 ボランティアも参加する展示交流員

特筆すべきは催しの企画から運営、展示ガイドまで、いたるところでの県民の参加と参加である。館内における親しみやすい面白い説明、子どもたちの研究の相談など、その活動は目覚ましい。さらに常に館内の問題点を把握するためにNPOの協力による「通信簿ツアー」を開催し、その結果をもとにしたワークショップによって、県民をはじめとする来館者の意見や提案を展示や運営に積極的に反映することも試みている。また、この県立博物館は八つ博物館であるというコンセプトをも打ち出し、県内全域の80の博物館、美術館と連携ネットワークを組み、情報と人の交流を行い、共同事業も実施している。

これらの先駆的な試みもあって、常識を覆しながら時代を確実に先駆けているのがこの山梨県立博物館だといえるだろう。

山梨県立博物館 かいじあむ

開館時間：9:30～17:00(入館は16:30まで)
休館日：月曜日(祝日の場合は翌日)・祝日の翌日・12/29～1/1
交通：甲府駅からバスで約30分
石和温泉駅からバスで約10分、徒歩約35分
中央自動車道一宮御坂ICから車で約8分
URL：http://www.museum.pref.yamanashi.jp/